

まさかの…
リアル彼氏ができました!

M o e k a & H o m a r e

藤谷 郁

Iku Fujitani

termity



エタニティ文庫

目次

まさかの…リアル彼氏ができました！

5

書き下ろし番外編 萌花は俺の嫁

337

まさかの…リアル彼氏ができました！

二十四年前の初夏、萌花は美園家待望の長女として生まれた。

四人兄弟の末っ子で、唯一の女の子である彼女は、両親はもちろん年の離れた兄三人にも可愛がられて育った。そう、とても可愛がられたのだ。傍には常に家族の誰かがいて、あれやこれやと世話を焼いてくれて……

——ん？ ちょっと待って。

思春期を迎えた頃、萌花は唐突に気がついた。いつ何時も誰かに干渉されているこの生活は異様なのでは？ ということに。そう、この生活は居心地が悪いということ。

——ああ、もう、うっとうしい！

両親はもとより、体育会系の兄三人も、うるさくてしょうがない。萌花の服装、態度、学校の成績や、さらには友達関係にまで、当たり前のように口を出してくる。

しかも彼らは全員柔道部員で、毎日が筋肉祭状態のガチムチマツチョ。がさつで暑苦しい男どもに囲まれ、萌花の男性観は歪なものになっていった。

——現実の男は美しくない。あああ、もう嫌！

いつしか萌花は、二次元の世界に理想の男性像を求めるようになる。もともと漫画やイラストレーションが大好きな彼女には自然な発想だった。

地元の高校を卒業し、東京の造形大学に進学すると同時に、念願の一人暮らしを始めた。もちろん、就職先も東京である。

萌花が生まれ育ったのは、外房の海が見渡せる自然豊かな町。大好きな故郷だけど、でもUターンはしない。

きちんと仕事をして、趣味のイラスト描きを楽しみつつ、東京で気ままに暮らす。二次元の世界で理想の王子様を完成させて、その彼をパートナーにして生きるのだ。

——現実のオトコなんていらぬ。自由がサイコー！

一人暮らしを始めて六年目。萌花は今、充実の日々を送っている。



ドアを開けると、初夏の明るい陽射しが溢れていた。

「わあ、眩しい」

五月の空に目を細めた萌花は、リュックを背負い直し、アパートの階段を軽快なステッ

プで下りていく。ホールを掃除していた管理人のおばさんが、「今日も元気だねえ」と、笑顔を向けた。

萌花の住む四階建てアパート、メゾン・タカナシの管理人夫妻は、彼女の両親と同じくらいの年齢だ。「行ってらっしゃい」と言われると、なんだか照れくさい。

駐輪場から自転車を出して、会社に向けて出発した。

シャッターの下りた商店街を抜けて、小学校の角を曲がって少し行くと大通りに出る。朝の街を、通勤の車や駅へ向かう人々が行き交っている。活気と忙しなさを感じるところに、目的地に到着だ。

コトー・コーポレーション。

オリジナルキャラクターの商品企画・販売を主な事業とする、業界では最大手の企業だ。ここ台東区に十二階建ての本社ビルを構えている。

萌花はビルの裏に自転車をとめ、他の社員らとともに通用口から建物に入った。

萌花の所属する企画制作部は、十階にある。ベストとスカートの制服を着た女性社員らの脇を足早にすり抜け、エレベーターに乗りこんだ。遅刻するわけではないけれど、せっかちな萌花としては、一つでも早いエレベーターに乗りたくて思ってしまう。

職場でも、小柄な身体でくるくると働いている。フットワークの軽い働き者だと感心されるが、これは性格によるもの。それに、動きやすいカットソーやパンツを愛用して

いるから、そのおかげでもある。制作部は服装が自由なのだ。

それに、入社二年目の萌花は職場の最年少……平たく言えば下っ端である。デザイナーの補助係兼、雑用係として、この軽快なフットワークが重宝がられていた。

「おはよう」

エレベーターのガラス窓から外を眺めていると、背後で可愛らしい声があった。萌花はリュックを抱っこした格好で身体を回転させ、後ろを向く。

にこりと微笑んでいるのは、秘書課の来生舞子だ。

「おはよ、舞子」

「萌花、来月の『女子会』覚えてるでしょうね」

「だいじょぶ。わかってるって!」

周囲の男性社員が、ちらちらと舞子を見ている。萌花にはうつとうしい視線に思えるのだが、彼女は満足しているようだ。

舞子の、涼しげに編みこんだ髪と白いうなじが、彼らの目を惹きつけている。初夏らしいヘアアレンジは、ショートボブの萌花には縁のない、計算された色香だ。

この来生舞子は同期の社員だが、実は高校時代の友人でもある。

二人はかつて漫画同好会に所属していた、オタク仲間だ。同人誌制作が活動のメインという、ほとんど趣味の集まりだったが、そこで過ごした時間はとても楽しい青春の思

い出だ。

高校卒業後、萌花は東京の大学、舞子は大阪の大学に進学した。舞子がいづれこちらへ戻ってくるつもりだと聞いてはいたが、まさか同じ会社に就職し、連日顔を合わせることになるとは思っても寄らなかつた。

オタクの魂が引き寄せ合ったのだろうか。

しかし、その件についてはすべて他言無用と、入社式の日、舞子に釘を刺された。

今でも同人活動を続けるディーブな腐女子なのに、彼女はそれを会社では隠すと言う。さらには、オタクであることをオープンにする萌花を、信じられないとも言った。

『別にいいじゃん。隠すなんて窮屈だよ』

『駄目、絶対に駄目。萌花は独身主義だけど、私は違うんだから』

オタク女子は、合コンでも飲み会でも男子に敬遠されるから——それが、秘密にする理由だそうぞ。

確かに今の舞子は、表面的にはモテ系女子だ。高校時代の地味な外見を捨てて、普段は一般人として振る舞っている。きっと、大学時代に何かあったのだろう。

でも、舞子が就職先で萌花と再会したことを泣くほど喜んでくれたのは事実だ。萌花も素直に嬉しかったので、二人は会社では、ごく普通の同期として付き合う約束をした。考えてみれば、舞子のようにオタクであることを隠すのが普通なのかもしれない。

「楽しみだよ、女子会」

「うん」

ここでの「女子会」は、女性向け同人誌イベントを意味している。

舞子のわくわくした様子に苦笑したところで、エレベーターが十階に到着した。

社員証をリーダーにかざして制作部のフロアに入ると、まずは更衣室のロッカーに脱いだ上着などを仕舞う。たいていの女性社員はここでパンプスやブーツをフラットな靴に履き替えるのだが、萌花はスニーカーなのでそのままだ。

明るく広々としたオフィスは、三つのスペースに分かれている。萌花が所属するのは、比較的新しくできた子供向けのキャラクターを扱う第三課で、オフィスの一番奥にある。

「おはようございます」

一課、二課の社員にも挨拶しながら、通路を進んでいく。

三課の社員はまだ誰も出社していない。萌花は端っこにある自分のデスクに座り、パソコンの電源を入れた。

ロック画面に、半裸の美形男性イラストが映し出された。彼はベッドに横たわり、こちらを物憂げに見つめている。萌花が尊敬するイラストレーター、凌星によるイラストだ。「おはようございます、アポロン様。今日も美しいですよ」

萌花は目尻を垂らし、身体をくねらせて挨拶する。

ギリシア神話に登場する神をモチーフに作られたアポロン様は、萌花の大のお気に入りで。麗しくも凛々しい顔立ち。筋肉質でありながら、すらりとしたスタイル。

凌星が描くアポロン様は、萌花の理想とする男性像に限りなく近い。それはもちろん、彼女がずっと追い求めている、二次元の王子様である。

ただ、残念なことに、限りなく近いのであって、完全ではない。

萌花は理想の顔、理想の身体を日々研究している。自分自身の手で萌花だけの王子様を完成させようと、毎日何枚もの妄想スケッチを重ねている。日々、並々ならぬ努力を続けているのだ。

アパートの部屋には、一人暮らしを始めて以来描き溜めたスケッチブックが山積みになっていて。パソコンに取りこめばスッキリするのだから、未完成のものをデータ化する気にはならない。

そんなこんなで、結局『彼』のスケッチは一枚も捨てることなく全部紙のまま取っただけ。

大学時代に、非オタク……つまり一般人の友達が家に遊びに来たことがあった。その時スケッチブックを見られたのだが、半裸の男性がずらりと並ぶイラストに、彼女らは揃ってドン引きした。でも、萌花は気にしなかった。そんなことより、理想の王子様が完成できないことが辛い。

どんなに努力しても、描ききれないモノがある。想像や妄想だけでは、どうしても表現できない。モノがあるのだ。

「美園ー、仕事始まるよ」

ぽんぽんと、軽く肩をたたかれた。振り向くと、先輩デザイナーの蒲生がいつの間にか立っている。

「あ、先輩！ おはようございます」

「まあた、アポロン様に見惚れてんの？ 好きだねえ」

蒲生は萌花が補助係をとめるデザイナーで、年齢は二十七歳。萌花の上には先輩デザイナーが三人いるが、その中では一番若い。

「ま、いいけど。仕事中はこっちの世界に集中してね」

「はいっ。頑張りますっ！」

萌花は職場で、自分がオタクであることを公表している。というより、隠す気のない萌花の言動により、自然と周囲に浸透した。

それに、制作部はクリエイティブな部署のため、あまり違和感なく受け入れられたのだ。その点、秘書課の舞子とは事情が違っている。

「でも、前から思ってたんだけど、このアポロン様ってキャラクター、部長に似てない？」

「えっ?」

モニターを覗きこむ蒲生に、萌花は目をぱちくりとさせる。

「部長って、湖東部長ですか？」

「そうそう。輪郭とか、肩幅とか。特にこの長い脚。どうよ？」
蒲生の指摘にちよつと驚きつつ、萌花はアポロン様を見直す。

(似て……るかなあ?)

「もしかして美園、ああいうタイプが好みなの？」

「は？ いやいやまさか。そんなこと考えたこともないです」

顔の前でぶんぶんと手を振る萌花に、蒲生はブツと噴き出した。

「だよー。部長はバリバリのリア充だし。別世界の人ももんね、あり得ないよね」

「そうですよ。そもそも私は現実の男子にまったく興味ないですから。全然、あり得ませんって」

萌花のきつぱりとした主張に、蒲生は肩をすくめながらも、特にコメントもせず立ち去っていった。

萌花はあらためてパソコン画面を見つめる。理想の男性像に限りなく近いアポロン様。この美形キャラクターが部長に似ているとは、思いも寄らなかつた。

(うーん、全体の雰囲気似てるのかな。顔というより、身体つき?)

よくわからず、首をひねる。萌花はそもそも、現実の男性に関心がないのだ。

しかし、アポロン様に似ていると言われたら、何だか気になってしまふ。

部長の名は、湖東誉ほまね。この春、企画制作部長に就任したばかりだ。

苗字からわかるように、彼は創業家の身内で、現社長、湖東幸男ゆきおの一人息子。近い将来、間違いなくトップに立つであろう、コトーの後継者である。

社長令息といってもナヨナヨとした坊っちゃんではなく、仕事の鬼だ。どんなに優秀な社員でも、彼の部下になつたら最後、厳しさに耐えられず、もれなく泣きが入るといふ。多少盛った話だろうが、実際彼が上司になると聞いて、課長や先輩達は青ざめていた。だが、仕事に厳しくとも、高学歴、高身長、その上美形だ。三十歳にして部長職だし、将来も約束された超優良物件。

(そうそう、舞子が何か言ってたっけ)

彼は最近恋人と別れたばかりでフリーの身。玉の輿こしを狙うなら今しかない！ と、女性社員は色めき立っているとのこと。

湖東部長は、三次元の世界における王子様のようなだ。

(ぶんぶん、考えてみると、部長ってキャラ立ちしてるなあ。BLボーイズラブのネタにもなりそう！ あ、だから舞子が噂してたのか)

自分の上司とはいえ、下っ端社員したばの萌花は、部長とはほとんど口をきいたことがない。だから遠い存在の人なのだが、急に興味が湧いてきた。

オタ女子の習性がむくむくと立ち上がり、妄想が膨らんでいく。部長はいつもスーツを着ている。おそらく高級なスーツだ。あれを脱いだら、アポロンのように引き締まった身体をしているのだろうか。

もし、蒲生の言ったとおり、アポロン様に似ているのならば……

「あっ、もうこんな時間だ」

萌花は我に返り、妄想を打ち切った。あと一分で始業時刻の午前九時になる。脱・オタクの時間帯へ突入だ。

アポロン様にさよならすると、急いでパスワードを打ちこみスタート画面に切り替える。

「部長、おはようございます」

「おはようございまーす！」

方々から活発な声が飛び、萌花も立ち上がった。

湖東部長は始業時刻ピッタリに現れた。初夏らしく、ブルートーンでまとめたスーツを着こなしている。

萌花は部長席へ進む彼を目で追った。遠くからでも、自信に溢れた表情がはっきりとわかる。彼はいつも、こんなにも堂々と登場していたのだ。

(知らなかった。初めてまともに見たような気がする)

後ろをひよこひよこことついていくのは、石橋課長。年齢は部長よりずっと上だが、助手役を兼任している。激務のためか、最近はかなり疲れた様子で顔色も悪い。髪の毛も薄くなったとの噂もあり、周囲に同情されているようだ。

部長はデスクに到着すると、部下達に向き直った。背筋がびんと伸びている。

ドット柄のネクタイを軽く直す左手首に腕時計が覗いた。萌花にはよくわからないが、外国製の一流ブランドに違いない。王子様に相應しい持ち物だ。

部長席はオフィスの中央正面に置かれ、ガラス張りの窓を背にしている。

萌花は額に手をかざし、目を細めた。

(あれ？ な、なんか、ミヨーに眩しいような)

「おはよう。今日もよろしく」

張りのある声で、社員に挨拶を返す。外見はお洒落なイケメンだが、声のトーンや口調は意外にも男らしい。毎日耳にしているはずなのに、今まで萌花は気がつかなかった。

「ほら、やっぱり似てるでしょ。ア・ポ・ロ・ン・さ・ま」

隣に立つ蒲生が、こっそりと耳打ちしてきた。

萌花は力をこめて頷くと、全体ミーティングを進める部長を凝視した。彼が輝いて見えるのは、窓から降り注ぐ光のせいばかりではない。

広い肩幅。きれいに伸びた長い脚。姿勢がいいのは、全身にバランスよく筋肉がつい

ている証拠だ。だからこそ、堂々とした態度が様になる。

そして、男性にしては珍しく透明感のある健康的な素肌。高い鼻梁を軸にして、眉、目、唇の各パーツが、完璧なバランスで配置されている。麗しくも凛々しい顔立ちは、王子様の条件だ。

自然なウエーブのかかる豊かな髪は、アポロン様のような黄金色ではないが、美しく艶めいている。

（おおお、な、なるほど。何もかもがそっくりだーっ）

湖東誉が企画制作部長に就任して、一か月半。

萌花はようやく、彼が理想の顔と身体を持つオトコだと認識した。

灯台下暗しとはこのことだ。

その日、萌花はいつものようにくくるくと働きながら、チラチラと湖東部長を盗み見た。

こんなところに生モデルがいた！

興奮と嬉しさのあまり、ガッツポーズを作ってしまう。

あの人をモデルにスケッチすれば、理想の王子様が完成する。もちろん、部長本人にこれっぽちの興味もない萌花だが、モデルとしては最高の逸材だ。

「張り切ってるねえ、美園ちゃん。その調子でいけば来年はチーフデザイナーに昇格だ

よお」

オフィスの隅で萌花がコピー取りをしていると、プランナーの堀内が声をかけてきた。プランナーとはキャラクターのイメージやコンセプトを立案し、デザイナーとともに、商品に合わせた図案を決定していく人のことを言う。

スパイラルパーマの髪に、パステルカラーのファッションでキメる二十六歳男子。三課の若手社員で、能力的にはますますだが、どこかふざけていて掴みどころのない先輩だ。

「ありがとうございますっ」

「ぶっ。ジョーダンだっ」

「はは……ですよねー」

馬鹿正直に反応する萌花が面白いのか、堀内はしょっちゅう絡んでくる。彼と仲のいい蒲生などは、忙しい時は無視してよしと笑うのだが、先輩社員に対してそれをするのは難しい。

それに、彼にとつては単なるコミュニケーションで、悪気はないようなのだ。

「でもね、正直なところ美園ちゃんが雑用やってくれるから助かるよ。他の課はバイトをわざわざ雇ってるけど、社員なら残業もOKだし融通がきくだろ？ キミがいてくれるラッキーって感じ」

「はあ。恐縮です」

何気に失礼なことを言われた気がしないでもないが、萌花は「ま、いっか」と流す。萌花は蒲生に頼まれたデザイン画のコピーを取り終わると、すぐにデスクに戻ろうとした。堀内に絡まれるのはいつものことだし、別に構わない。

「けれど、張り切っていると指摘され、ちょっと動揺していたのだ。」

「それでは、私はこれにて……」

「悪い、これも頼む」
さっさと歩き出そうとした萌花の前に、書類を差し出す人がいた。コピーの依頼である。

（でも、この声って……ええっ?）

小柄な萌花は顔を勢いよく上げ、背の高いその人を見た。

三次元の王子様。今、萌花が生モデルとして大注目する湖東部長その人が目の前に立っている。

「は、はいっ、承知いたしました」

こんな間近にいきなり来られて、萌花の心臓はばぶばぶと、猛烈な速さで運動を始める。自分でも信じられない過剰反応。

仕事なのに、オタクモードに突入してしまった。

入社以来初めての現象に萌花は戸惑うが、そんな場合ではない。
（千載一遇の大チャンス。しっかりと観察せねば!）

「な、何部コピーいたしましたしょう」

萌花はへこへこした。えらく卑屈な態度になってしまいが、仕方がない。無料で生モデルになっただけのくさだ。

「一部でいいよ。ええと、君は三課の美園か」

「そうです、ハイ。ワタクシ、美園萌花と申します。あ、こちら一部ですね」
書類を丁寧に押し戴くと、コピー機にセットした。

今、しっかりと顔を見た。目鼻のバランスがいい。絶妙だ。顎の線も、田舎の兄達のような直角ではなく、美麗な曲線を描いている。

萌花は興奮しながらコピー機のボタンを押す。たった一部なんて光の速さである。もっと観察したいのに。

「そうだ、おい」

「はいっ?」

鋭い呼びかけに、邪念を見透かされたかとビクついたが、部長の視線は萌花の頭を飛び越え、後ろに向けられている。すっかり忘れていたが、堀内がまだ近くに立っていたのだ。

「アズマプロダクツの案件、来月の部長会議にかけろ。必要なのはメーカー用の資料。あと、アイテム別の企画書も提出するから用意しておいてくれ」

声もいいなあと、萌花は感心する。声は絵にできないが、イメージとして記憶しておこうと思った。

コピー用紙と原稿を揃え、部長に差し出す。

「ど、どうぞ。できました」

「サンキュ」

部長がコピーを確かめる。伏せた目の睫は長く、美しい。

（わあ、きれいだなあ。本当に、アポロン様みたい）

それにしても、いざ観察しようとしても距離が近すぎて目が泳いでしまう。我知らず動きが挙動不審になっていたらしく、部長は萌花を不思議そうに見返してきた。

「どうかした？」

「はっ、いいえ。別になんでもありません」

萌花が首を振ると、部長はなぜかクスツと笑う。一般女子なら軒並みハートを持っていかれるであろう、輝ける笑顔だった。

「美園、君はデザイナーだったな」

「はい。蒲生さんの補助係でありますっ」

まさか話しかけられるとは思わず、萌花は兵隊のような受け答えをしてしまった。心身ともにガチガチに固まっている。もはや観察するどころではない。理想の男性像に限

りなく近いアポロン様そっくりのナマモノを前にして、平静でいられようか。

「そうか。元気があってよろしい」

部長は子供を褒めるみたいに言うのと、あつさりと立ち去ってしまった。

（あっ、ちょっと待っ……）

萌花は部長の背中を目で追いつつ、急いで頭の中にデッサンした。後ろ姿も実に理想的だ。

「美園、お前も人の子だなあ」

「え、あ、はい？」

堀内がスパイラルパーマに指を絡ませ、にやにやしている。意味ありげな言い方にぎくりとした。

「部長に見惚れちゃって」

「ええっ？ いやいや、違いますよ」

萌花はあらぬ誤解をされたかと焦ったが、堀内はひらひらと手を振った。

「ジョーダンだつて。部長みたいな男は、お前にとっては何次元の存在だろ」

今朝、蒲生にも似たようなことを言われた。だけど、異次元というのは的確な表現だ。「そりゃそうです。私は三次元の男に一片の興味ありませんから」

「ぎゃはは！ お前ってマジで変な奴」

いつまでも笑っている堀内を残し、萌花はデスクに戻った。頭の中に描いた部長のデッサンが零れ落ちないように慎重な足取りで。

仕事中にオタクモードが発動すると、あんな状態になるのだ。萌花にとつて、なかなか新鮮な体験だった。もちろん、仕事中は脱・オタクが基本だが、少しでもあの高揚感を得られるのなら、会社も楽しくなりそうさ。

(でも、私は下っ端だし、さっきみたいなチャンスはそうそうないだろうな)

萌花は部長に接近するための方法を探そうとしたが、どうしても見つからなかった。

その日、アパートに帰ると実家から荷物が届いていた。開けてみると、いつものように果物や瓶詰めの惣菜、萌花の好きな菓子がぎっちりと詰めこまれている。

「まったく、いつまでも子供扱いなんだから」

一つ一つ整理しながら、ふと、湖東部長を思い出す。彼は萌花に『元気があってよろしい』と、子供の相手をするみたいな言い方をした。

彼は三十歳、萌花は六つ年下の二十四歳。年の差のせいだろうか。

「うーん、どうだろう」

壁に立てかけた姿見に全身を映した。小柄で童顔。髪は素朴なショートボブで、メイクも地味。着るものもスポーティカジジュアルで、色気ナシ。

現実の男と付き合った経験はなく、この先付き合うつもりもない。独身で気ままに暮らしていくのだから、子供っぽがるうがどうでもいい。

しかし、子供と思われては、部長という立場のあの方に近付けない。少しは大人っぽくして、仕事できますよ！ みたいなアピールをするべきだろうか。

それは、昼間から考えていることの続きだった。湖東部長に接近するには仕事上でかわるしかない。それには、どうすればいいのか。

萌花はデザイナー補助係。入社二年目だというのに、デザイン画ひとつ描かせてもらえない。それどころか、雑用が増えるばかりだ。

部長のもとで企画を推進させていく主要デザイナーになるなど、いつのことやら。三課の先輩社員は新人を育てる気があるのだろうか、少し不安になってきた。

コトーのキャラクター商品は、子供の頃から好きだった。漫画やアニメとはまた違う、シンプルな線で構成されたキャラクターは可愛らしい。いつも傍にいてくれるキュートな友達だ。

昔から人気のキャラクターは、大人になった女性達に、今も大事にされている。コスメ、ジュエリー、下着にまでも商品化されているが、そのデザイン案は企画制作部で生まれている。

三課の扱う小さな子供向けのキャラクターも、将来はそんなふうにあわれ、大切にさ

れるかもしれない。そう考えるとわくわくしてくるのだ。

(でも、まあ、今は仕方ないよね。それに、雑用も嫌いではないし)

デザイナーばかりでなく、プランナーも手伝っている萌花は忙しいけれど、そのぶんいろいろな仕事を見ることが出来る。それに、あちこち動き回るのは得意で、フォロー業務はやりがいがある。

これらの経験がいつか、デザインの仕事に役立つと信じている。

そう、外見だけ大人っぽくしても、それで湖東部長に近付けるわけではないのだ。チャンスはいずれ巡ってくるはず。小さなチャンスでも逃さないためには、どんな仕事もおろそかにしてはならない。

理想の王子様を完成させるため、反射神経は常に研ぎ澄ませておくのだ。

「理想の……そうだ、まずはそっちをやんなきゃ」

荷物の整理もそこそこに、萌花はスケッチブックを広げると、昼間頭の中でデッサンした湖東部長を描き写した。憶えているうちに、しっかりと紙の上に残さなければ。

アポロン様に似た顔の輪郭、目鼻立ち。あの長い睫など、ほとんど神の領域だ。均整の取れた体格も見事としか言いようがない。肩幅が広くてスーツがよく似合って——萌花は鉛筆を止めた。

根本的な問題に行き当たったのだ。

確かに、部長は生モデルだけに、想像や妄想では得られない具体的な描写が可能だ。これまでに比べれば、格段の進歩だと感じる。でも、萌花が描きたいのはそれだけじゃない。

部屋の一角を振り返った。

スケッチブックが山積みになり、1Kという狭い空間を圧迫している。そこに描かれているのは、すべて半裸の男。だけど萌花が本当に描きたいのは、頭のとっぺんから足のつま先まで、完璧に理想とおりの「全裸」の男である。しかも、自分が望むとおりのポーズをとってほしい。

だが、萌花は男性のすべてを知らない。言うまでもなくエッチの経験ゼロで、現物を目にする機会が皆無だったのだから、描きようがないのだ。

——いや、機会はあるにはあった。大学時代の、男性のヌードデッサンを体験する講座でのこと。モデルは全裸で、ポーズもリクエスドできるといのでかなり期待したのだが、『なんか違う』で終わった。モデルは恰幅がよく、お腹の出ているおじさんだったのだ。

「駄目だ。せっかく見つけた生モデルなのに」

どんなに努力しても、描ききれないモノ……

「スーツなんか着てちゃ駄目です。湖東部長、全裸で出勤してください！」

萌花は床に突つ伏すと、上司に対しての切実な要望を叫び、嗚咽した。

一週間後――

萌花は相変わらず三課の雑用係として、くるくる動き回っている。

湖東部長に接近するチャンスはなかった。先週、コピーを頼まれたのは僥倖か、それとも、神様のいたずらだったのかもしれない。

だが部長の姿は毎日目にはいるので、例のデッサンは続けている。

スケッチブックにたくさん描かれていくのはスーツ姿の湖東部長。衣服で隠されている部分を想像で描いてみるが、想像はしよせん想像だ。満足できるはずもない。

「あーあ、脱いでくれないかなあ」

萌花の呟きに、隣でお茶を飲んでいた舞子がゲホゲホとむせた。

「ちょっと萌花。なに言ってるのよ、こんなところで」

「大丈夫だよ。誰も聞いてないし」

社員食堂はざわざわと賑やかで、ため息まじりの呟きなど、かき消されてしまう。

「もう、あきらめたら？ あのお方のハダカを拝むなんて、一生かけても無理無理」

「だよねえ。いくら接近しても、肝心なところが見えなきゃ無駄だもんね」

萌花は、湖東部長に対する願望を舞子にだけは話してある。実は、舞子も湖東誉とい

う男性をBLに使える逸材として注目していた。ゆえに、その気持ちはすぐに理解してもらえた。

「かっこいいもんね、あの人。言われてみれば、流星の描く男キャラに似てるわ」

「でしょ、でしょー？ つまり、私の理想に限りなく近い生モデルなのよ。それなのに、全裸……」

「あ、ちょっと萌花。シイッ」

舞子に肘で突かれ、おししゃべりをストップする。と同時に、同じテーブルに、三人の女性社員が近付いてきた。

「こんにちは。こちら、座ってもよろしいかしら」

「あっ、どうぞ、どうぞ」

萌花は、向かい側のテーブルにはみ出していたポーチを慌てて引っこめる。

声をかけてきた女性に見覚えがあった。企画制作部で開くリーダー会議に時々参加する、商品開発部の社員だ。ミーティングルームに出入りする姿をチラッと見かけたことがあるくらいだが、品のある美貌とスタイルの良さが印象的だった。

（ファンタジー世界の高貴な女王様みたい。ああいう人には是非コスプレしてほしい）などと、勝手に考えたりしていた。

そのご本人にいきなり正面に來られ、ちょっと動揺してしまう。もっとも、彼女は萌

花の顔を覚えていないようだが。

「ありがとう。さあ皆さん、座りましょう」

「はい、黒崎さん」

両脇に控える部下と思しき女性が二人、彼女に続いて席についた。

萌花はトレイに箸を置くと、目の前の三人をなんとなく窺った。

商品開発部も、服装自由の部署である。黒崎と呼ばれた中央の女性は、その美貌と気品に相応しく、上質でありながらも華やかなブランド服を纏っている。

それと対比して、部下の二人はいずれも地味な色のカーディガンを羽織り、ブラウスのデザインもおとなしめ。女王様につかえる侍女といった雰囲気だ。

萌花は舞子と顔を見合わせると、お茶の残りを一気に飲んでテーブルを立った。

「お先に失礼します」

ぺこりとお辞儀をすると、黒崎は笑みを返してくれた。女王様のように気品溢れる笑顔に見送られ、二人はそそくさとその場を離れた。

ファンタジー世界ならぬ、リア充の女王様——

なぜかそんなフリーズが、萌花の頭に浮かんだ。

「ねえ、知ってた？ 今の人って、湖東部長の元カノだよ」

社員食堂からオフィスに移動しながら、舞子がヒソヒソ声で教えてきた。

「へえ、そうなの？」

「黒崎可憐。二十七歳独身。一流大学出身の才色兼備。なんとコトーの取引先の娘で、いいところのお嬢様なんだって」

「詳しいね、舞子」

「秘書課の情報通に聞いたのよ。男の人は結構彼女に憧れてるみたい。でさ、湖東部長って、以前は商品開発部にいたじゃない。黒崎さんとは同じチームで仕事するうちに恋愛関係に発展したらしいよ」

「ほう」

部長が最近別れたという相手は彼女か。部長と彼女なら美男美女の組み合わせで、恋人だったとしても違和感はない。なるほどねと萌花は納得した。

「でも、あの二人がどうして別れたのか誰も知らないのよ。どっちかが浮気した感じでもないし、原因がはっきりしていなくて」

「ふーん」

他人の色恋沙汰や噂話は、萌花にとって最も関心の薄い話題である。半分上の空で返事をした。

てすぎて女に飽きたとか、特殊な趣味に目覚めたんじゃないとか、既にその世界にハマってるんじゃないかとか、いろいろ可能性はあると思わない？」

「あ、いけるかも！」

そっち系の話題なら前のめりだ。萌花の作る同人誌はイラストオンリーで、舞子はBし漫画がメイン。形態が異なるが、萌花のイラストにもBL要素はある。

湖東部長は、妄想大好き同志として逃すわけにはいかない逸材キッカとなった。

「部長には、溺愛する部下がいるとか？」

この場合、それはもちろん男である。

「そうそう、ほら、萌花の部署のなんて言ったっけ。ふわふわとした髪型で、シニカルな感じの」

「へ？もしかして堀内さん？」

「うんうん、あの人どう？『受け』にピッタリでしょ」

萌花は部長と堀内の絡みを想像し、苦みばしった顔になる。

「だめだめ、あの人は小物すぎる。萌えが足りないよ」

先輩に対して失礼な言いぐさだが、妄想の世界では上下関係などぶっとんでしまう。萌花はあらためて、部長の大物振りを口にした。

「その点、湖東部長ってキャラ立ちしてるよねー」

「そうか？」

突然割りこんできた低音に、萌花は総毛立った。

この男らしく張りのある声は、まさか。

恐る恐る振り返ると、そこには――

スーツの上着を肩に引っ掛け、ネクタイを緩めた姿の王子様がいた。どこかで昼寝でもしてきたかのような、リラックスした風情。

だが、目つきは鋭く萌花を捉えている。

「こ、湖東部長」

いつの間にか、二人はエレベーターホールにたどり着いていた。ここは特に声が反響するということに、ついつい興奮して、声高に話していたようだ。

「わ、私、ここで失礼いたしますう」

「へっ？」

舞子はじりじりと後ずさると、棒立ちになっている萌花を残し、階段へ逃げてしまった。

（そ、そんなあ）

シンと静まり返るホールに部長と二人きり。取り残された萌花の背中に冷や汗が伝う。部長がどこから出現したのか――というより、どの辺りから聞かれていたのか、それが問題だ。

しかし、そんなことを追及する余裕など、あるはずもない。

「美園」

「はいっ」

思いきり上ずった返事に部長は目を丸くするが、なぜか楽しそうに笑い出した。

萌花はほかんとして見上げる。まったく気取ったところのない、大らかな笑い顔。明るく洗刺として健康的で、太陽みたいな人だと萌花は思った。

「……で、美園。さっきのことだけど」

「うっ、はい」

怒ってはいないようだが、不穏な空気を感じる。

「キャラ立ちつてのは、いい意味なんだろう？」

思わぬ質問に、萌花は顔を上げる。遠まわしに皮肉っているのではと悪いほうに考えるが、それは違うようだ。部長は目元に笑みを残しているものの、真面目な様子である。

「はい、もちろんそうです。二次元でも三次元でも、それは褒め言葉です！」

「二次元？」

ぱっと口を押さえた。生モデルの前に、つい余計なことを言ってしまった。

萌花は焦りまくるが、当の本人は興味津々の様子で見下ろしている。

「二次元っていうと、具体的には？」

「そ、それはですね……」

この前の、コピーを頼んできた時よりも接近し、そしてどういうわけかじりじりと迫ってくる。

（ううっ、この顔、この身体つき、麗しすぎる）

萌花の心臓はまたしても激しく運動を始め、興奮してきた。

そういえば今日の部長は上着を脱いだワイシャツ姿。裸体に一步近付いた胸板に、萌花は目を凝らす。素肌が透けて見えないだろうか。

（いや、駄目だ。どうやら下着を着ている。くうっ、私に透視能力さえあれば）

「おい、美園」

「ぎゃっ」

上司の厳しい声に、萌花は中二病的オタクモードを解除した。否、解除させられた。

「ちゃんと答える。どうなんだ」

「はい、すみませんっ」

美形の人が真顔になると美しさが際立ち、ぞくつとするほど怖い。バクバクする心臓を押さえ、ビクつきながら質問に答える。

「つまり、漫画とか、アニメとか、イラストとか、平面世界でってことです。部長は絵になるっていうか、なんとというか」

「漫画……ああ、君はそういうのが好きなんだってな。オタクだと、堀内が言った」
堀内の名前が出て、ぎくりとする。部長とのカップリングを話題にしたばかりだ。
「それに、面白いことも聞いたぞ」
「？」

萌花ははらはらするが、部長は特に不愉快そうな様子も見せず、それこそ、面白そうな顔をしている。

「堀内は変だと言うが、俺はそうは思わんよ」

「はあ」

一体何の話なのか、よくわからない。

「画一的な考え方は嫌いだね。だから、美園の感性には期待している。仕事にどう反映されるのか、楽しみにしてるよ」

エレベーターが到着し、萌花は部長に背中を押されるようにして乗りこんだ。

どうやら部長は、仕事の話をしていたらしい。ご機嫌な様子から、舞子との会話を聞かれたわけではないのだと察した。萌花はとりあえず胸を撫で下ろす。

エレベーターには数人の女性社員が乗っていた。湖東部長は三次元の王子様らしく、彼女らの熱い視線を一身に集めているが、そ知らぬ顔で街の景色に目を向けている。
(でも、面白いことってなんだろう)

部長の端麗な横顔を、萌花は不思議な気持ちで見上げた。

六月に入つてすぐ、関東地方は梅雨入りした。

萌花は相変わらず仕事では雑用ざように追われ、その合間に湖東部長を観察する日々。スケッチの数は恐ろしい勢いで増えていったが、内容にこれといった進展は見られない。

湖東部長の全身は、それで描けるほど形を把握している。

ただし、それはあくまでもスーツ姿だ。脱いだところを観察できなければ、理想の王子様は完成しない。萌花にとつて肝心なのは、生身の姿である。

「その代わりスーツの形状には詳しくなったよ。どんなポーズでも描けそう」

終業後の休憩コーナーでコーヒートを啜すすりながら、舞子に近況報告した。他に誰もいないので、赤裸々な話ができる。

「それって使えるじゃん。次回はリーマン本にしなよ」

「うーん。でも、今は新刊を作る気分じゃないっていうか」

雨の音が、自販機を置いただけの小さな部屋に響いている。

梅雨入りからこっち、毎日のように雨が降り続き、気分も減入りがちだ。自転車通勤の萌花は、これから合羽かっぱを着てアパートに帰らねばならない。それも憂鬱ゆううつだった。

「やっぱり、チャンスは仕事からかなあ」

一縷の望みを眩くが、可能性はゼロパーセントだろう。以前、湖東部長が、君の仕事を楽しみにしている、というようなことを言った。ならば、何か仕事を与えてくれるのではと期待したが、そんなうまい話があるはずもない。仕事というのは、自分でもぎ取るものだ。

でも、今の立場でもぎ取る暇もない。萌花の仕事は雑用だが、三課の中では不可欠な業務なので量が多い。また仕事の内容は、湖東部長のそれとは直接関係しない。

壁の時計は午後七時を示している。残業を終えたらアパートに帰り、今夜も湖東部長をせっせと描写するのだが、あいにくスーツ姿のみだ。

(ああ、なんて不毛な日々……)

もういつそのこと、正面から堂々と「全裸モデルになってください」と頼もうか。

でも、それをやったら会社をクビになるだろう。何しろ相手は社長令息である。と言うより、そもそも部長が、「いいよ」なんて言うわけがない。

萌花は飲み終わった紙コップを、分別ごみの箱に放りこんだ。

「でもさ、部長ってオタクに偏見のない人なんでしょ。言うだけ言ってみたら」
舞子が冗談まじりに提案する。偏見がない、というのは萌花が教えたことだ。

画一的な考え方は嫌いだと部長は言った。萌花のことも、『堀内は変だと言うが、俺はそうは思わんよ』と、肯定してくれた。あの時は何のことかわからなかったが、今思

うとそれは、萌花の趣味嗜好しじょうについてだと推測できる。堀内のことだから、萌花のことをオタクの変わり者とても吹聴したのだろう。それなのに、だ。

「でも、さすがに全裸は引くと思う」

「あはは……まあ、そうよね」

苦笑いで同意する舞子に、萌花も力なく笑みを返す。

なんだか疲れてしまった。もう、こんな不毛な生活はやめよう。生モデルなんていらぬ。これまでもどおり、妄想力のみで理想の王子様を完成させよう。

のろのろと休憩室を出たところで、呼び出し音が鳴った。萌花が首にぶら下げた社内連絡用の携帯電話からだ。見ると、制作部オフィスからと表示されている。

「うわー、今頃？ 何の用事だろ」

「制作部って忙しそうねえ……って、明日ちゃんと遊べる？」

「大丈夫。池袋東口、いつものところに十時だね」

舞子に手を振ると、オフィスへと急ぎながら端末を耳にあてがう。

デザイナーの先輩は既に退社している。プランナーの誰かだろう。帰りがさらに遅くなりそうだがっかりするが、それでも萌花は元気に応答する。

これが今の自分にできる精一杯のことだ。

「はい、美園です」

『湖東だ。これから言う資料を揃えて、十一階の第二会議室まで届けてくれ。大至急！』

「……」
 思わず足を止めた。電話をかけてきたのは、予想だにしない相手。
 (こっ、湖東部長？ えっ、どうして……って言うか、なぜ私に？)

『もしもし、美園。聞いてるか』

「はいっ」

部長の声は切迫している。しかも美園とはつきり呼んだので、間違い電話ではない。
 (もしかしてこれは、私個人への仕事の指示。待ちに待ったチャンスってこと？)

目が生き生きとしてきた。モデルをあきらめかけると、どこからともなく出現する部長。一体全体、何がどうなっているのか。運命の神様は相当なひねくれ者に違いない。

様々な疑問が渦巻くが、あれこれ考えている場合ではない。萌花は電話に集中した。部長会議に必要な書類は堀内が揃えたのだが、資料の一部に間違いがあるとのこと。

部長が訂正を命じたのだが、直っていなかったらしい。

堀内は既に退社している。残業中の萌花に、『週末の夜は合コンだよん』と、わざわざアピールしていったのでよく覚えていた。

『君に任せれば安心だと、三課の先輩方が保証済みだ』

萌花は堀内の資料作りを手伝っていた。ファイルのパスワードを知っているので、開

くことができるのだ。

「はいっ。すぐにやります。やらせていただきます！」

『よし、会議室で待ってるぞ』

転びそうになりながらオフィスへ戻った。

オフィスでは堀内の上役であるプランナー二人が、オロオロした様子で待っていた。ついさっきまで、湖東部長がここにいたらしい。

「美園さんはデザイナーの補助係なのに、すまないね」

「堀内には、きつく言っておくからね」

詫びる二人に、萌花は「大丈夫です。頑張ります」と返事をしてパソコンの前に座る。でも、妙な感じだった。この二人だって、これまでデザイナーも何も関係なく萌花を雑用ざつように使っていたのに。今日の残業も、半分は彼らから頼まれた仕事だ。萌花に日々雑用を頼むのは堀内ばかりではない。今まではそれが当然だったのに。

(部長が何か言ったのかな)

そうかもしれないが、よくわからない。とりあえず、目の前の仕事に集中した。

部長に言われたとおりの箇所を直し、慎重かつスピーディに関連するところをチェックして資料を作成した。必要な部数を作り上げると、十一階の第二会議室へダッシュだ。

「お待たせいたしました！」

「おう、速攻だな」

湖東部長は会議室の前で待っていた。資料を渡すと彼は中身を確認し、萌花の腕をほんぽんと叩いた。

「ありがとう。助かったよ、美園」

「いえ、そ、そんな」

心のこもった礼に、もじもじしてしまふ。一人前の部下として扱われた気分だった。

部長が会議室に入るのを見届けると、萌花は額おだいの汗を手の甲で押さえた。資料作成などお手の物だが、あんなふうに感謝されたのは初めてな気がする。

「よーしっ、残りの仕事もばりばり片付けるゾ」

誰もいない廊下でガッツポーズを決めると、素早くオフィスに戻った。

仕事を終えると、午後九時を回っていた。ライトを半分落とした薄暗いオフィスに、萌花は一人きりでいる。最後まで残るのは久しぶりだった。

大きく伸びをすると、ガラス張りの窓を眺めた。向かい側のビルは明かりがほとんど消えて、雨の夜に沈んでいる。なんとも言えず寂しい光景だ。

「うーん。それにしても……」

萌花はデスクに頬杖をついた。

さつき部長に頼まれたのは、仕事は仕事でも突発的な作業だった。電話で直じかに頼まれたことについて興奮してしまっただが、独立した仕事を任されるとか、そういった種類のものではない。

やはり、チャンスでもなんでもなかったということ。

「こんなんじや、湖東部長との継続的な関係に繋がらないよね」

空しく呟ひないていると、オフィスのドアが勢いよく開いた。

「おっ、美園。まだいたのか」

「ああっ、はいい！」

静かなオフィスでぼーっとしていた萌花は、思わず大声を上げてしまい、自分の手で口を塞ふさぐ。現れたのは湖東部長である。

「騒さわがしい奴だな」

「ど、どうもすみません」

部長が会議に出ているのをすっかり忘れていた。他の社員が次々といなくなったので、あやうく萌花もオフィスの戸締りをして帰ってしまうところだった。

（ふいー。危ない、危ない）

部長は席に着くなり、タブレットに何か入力し始める。だがそれも数分のこと、デスク周りを手早く片付けると、椅子から立ち上がった。

「仕事は終わり？」

萌花はきよろきよろするが、他に誰もいない。ということ、今は自分に声をかけたのだ。

「はい、終わりました」

慌ててパソコンをシャットダウンする。

「よし、それじゃ行くか」

「はいっ」

一緒に退社をうながされるなんて思わぬ展開である。ぎくしゃくとした動作で、部長の後についてオフィスを出た。

萌花が更衣室でレインブーツに履き替える間、部長はフロアの外で待っていてくれた。

「すみません、すみません」

ぺこぺこ頭を下げながら、上目遣いで表情を窺う。

いつもながら、アポロン様とそっくりな端整な顔立ち。すらりとしたプロポーション。

三次元のオトコと知りながら、萌花は興奮してしまう。フロアはライトが抑えられ、海の底にいるかのように。そして、その青みがかかった薄暗い空間が、湖東部長の姿を幻想的に見せているのだ。

「ん、それは？」

エレベーターに乗ると、部長は萌花が脇に抱えたものに注目する。梅雨に入ってから手放したことの無い、愛用の合羽だ。レインコートではなく、あくまでも合羽と呼びたくなるヒヨコのように明るい黄色が、目に付いたのだろう。

「へえ、自転車通勤？」

「そうなんです。はは……」

「ふうん」

珍しそうに見回してくる。自転車通勤の女性社員は他にもいるが、雨の日に合羽を着てまで乗ってくるのは萌花くらいだ。他の女性は、お洒落なレインコートを羽織り、バスか電車を利用して通勤する。

「今朝なんて土砂降りだったぜ。根性あるなあ」

ますます興味深そうに見下ろしてきた。いつもは部長が観察対象なのに、逆にじろじろと見られて居心地が悪い。勝手な心理だが、実に困ってしまう。

早く一階に着かないかなとそわそわし、目をキョロつかせる。

「なあ、美園。俺、車なんだが送ってやろうか」

「へ、はい？」

——送ってやろうか。

唐突な申し出に、しばしぼんやりとする。

送る、というと、それはつまり……

雨の中、自転車漕いで帰るのは大変だから車で家まで送ってやる。と、部長は言っているのだ。

「ええー？ いやいや、そんなこと。とんでもないですよ！」

萌花は全力で頭を勢いよく横に振る。

部長という上の立場の人間に対する、反射的な遠慮だった。

「そうか。君には今日、迷惑をかけたからな。こんなに遅くなったのも、俺のせいじゃないのか」

「違います。遅くなったのは他の仕事があるからで、予定どおりですから」

それに、部長に頼まれた仕事はそもそも堀内のフォローである。部長はちつとも悪くない。迷惑だとか、そんなふうには考えているとは意外だった。

「しかし、ひどい降りだぞ」

エレベーターのガラス窓を、大粒の雨が叩いている。遠くに光るのは雷かみなりだろう。いつの間にか荒れた天気になっていた。

「ほ、ほんとですね」

曖昧あいまいに頷きながら、萌花は合羽かっぱを握りしめた。実は、さつきから別の意思がむくむくと立ち上がっている。

かつて、こんなチャンスがあっただろうか。部長に接近するため仕事上のチャンスを狙っていたが、そこに拘とどまる必要はない。この際、なんでもいいではないか。

——部長ってオタクに偏見のない人なんですよ。言うだけ言ってみたら。

舞子の声が萌花を後押しする。

でもそれは、あまりにも唐突で、突拍子もない提案だ。

「どうする？ 遠慮しなくてもいいんだぞ」

エレベーターで二人きり。子供に話しかけるように、上体をかがめて覗きこんでくる。理想的な顔や身体を目の当たりにして、萌花は頭がぼーっとしてきた。

いつの間にか、オタクモードが発動していた。湖東部長は願望成就のため必要な生モデルだ。

そして、萌花の感性に『期待している』と言ってくれた。

突拍子もないことだけど……もしかしたら、ひよっとして。

「ぶ、部長」

「ん？」

「ぜ……ぜん」

「なに？」

さらに顔を近づけてきた。睫まぶたの先が額ひたいに触れそうさ。

「どうした、はつきり言え」
 「ぜつ、全裸モデルになつてくれませんか？」

翌日の土曜日。本日会社は休みで、萌花は舞子と池袋で遊ぶ約束をしていた。

腐女子の聖地、乙女ロードを散策し、東急ハンズで画材を買い、その後ランチを楽しむながら同人イベントの話題などで盛り上がる——という幸福な休日を通すはずだったのに。

「ええーっ？ 言っちゃったのお！」

舞子の絶叫が、手狭な1Kの部屋にびんと響いた。

「うん、やってしまった……」

布団の中で鎮く萌花に、舞子が頭を抱える。

「だから熱が出たの？」

「それもある」

萌花は自分の額に手を当てた。湯気が出そうに熱い。

「頑丈な萌花が風邪引いたって言うから心配して見にきたら、そういうわけだったのね。ああ、なんてこと。あんたがクビになったら、私は誰と萌え語りすればいいのよおおお」
 天井を仰いで嘆く彼女に、萌花は掛け布団に隠れるようにして言い訳する。

「だって、舞子が『言うだけ言ってみたら』って提案したから」

「あんなの冗談に決まってるでしょ。もうっ、信じらんない」

ブンブン怒っている。それはそうだろう。あれは冗談だったと、萌花だってわかっている。ただ、自分のしたことがあまりにも恥ずかしくて、責任を連帯してほしかっただけ。「ごめん、舞子。でも、大丈夫な気もするんだ」

「……へ？」

萌花はぼそぼそと打ち明けた。この話には、まだ続きがあるのだ。

部長に告げた直後、萌花は即座に後悔した。

ああ、これでクビだ。せっかく入った会社なのに、よりによって社長令息に逆セクハラしてしまったのだ。明日からプータローだ。兄達からは説教されるだろう。実家に連れ戻されるかもしれない。理想の男性像に限りなく近い、部長の全裸を拝みたい！ という、どうしようもない願望の強さに負けてしまったのだ。本当にどうかしていたと思えない。

でも——

あの時、部長は確かに驚いていた。

薄茶色の瞳に動揺が走ったのを、萌花は間違いないと見とめている。

しかし、それはほんの数秒のことで、彼はすぐに微笑を浮かべた。面白そうに、嬉し

そうに、わくわくした様子で萌花を覗きこみ、そして、こう言ったのだ。

『わかった。考えておく』

萌花は混乱した。

(考えておくって、私の処分？ クビにするかどうか？ ……ですよね。そうに決まってる！)

『とにかく、今夜は送っていくよ。家はどの辺？』

だが、萌花はもう何も聞いていなかった。後悔と恥ずかしさでパニック状態だ。

エレベーターが一階に着くと脱兎のごとく逃げ出した。ロビーを横切り突っ走る。部長が何か言いながら追いかけてきたが、全速力で通用口を駆け抜け、振り切った。

そしてそのまま、合羽も着ずに自転車で帰ったのだ。嵐のような雨の中を……

アパートの部屋に逃げこんだ萌花は、しばらく暗い中でうずくまっていた。寒さと怖さで、がたがたと震えが続く。もうお終いだという絶望感に苛まれて。

だが、かなりの時間が過ぎて、ようやく落ち着いてきたところで思い至ったのだ。

『考えておく』というのは、『全裸モデルになってくれませんか』という要望に対する答えではないか、と。流れるに、そう受け取ることができる――

「でもさ、あり得なくない？」

ジンジャーティーを運んできた舞子が、萌花が起きるのを手伝い、背中にクッション

をあてがってくれた。萌花は女友達のありがたさを感じつつ、温かいカップを両手で包む。

「うん、ほんと、あり得ないんだけど」

部長は怒りもせず、ドン引きもしなかった。それどころか、微笑んでくれたのだ。

――なぜあの人は微笑んだのだろう。

「かえって面白そうな感じだったよ。嬉しそうっていうか」

「うーん。でもさ、やっぱないわー」

舞子は断定的に言った。

「あまりにも突拍子もないことだから、無難に答えたのよ。ほら、大人って子供の空想話をうんうんって聞いてくれるけど、結局は流すでしょ。それと同じで、とりあえず『考えておく』って言っとけばいいだろ、みたいな」

「そ、そうかなあ」

そう言われてみればそんな気もしてくる。

(確かに部長は、私のことを子供扱いしているような。ということは……あの微笑みは、小さな子供の言動を面白がるみたいな感じ？)

「本気にしてないってことかな」

「うん」

迷わず頷く舞子を見て、萌花は熱が急速に冷めていくのを感じた。

月曜日。今日は梅雨の晴れ間で、青空が広がっている。すっかり平熱に戻った萌花は、自転車に乗って会社に向かった。

湖東部長の『考えておく』という返事について、ペダルを漕ぎながらぐるぐると考えた。やはり、どうしても、舞子の説が正しく思われてくる。

（そうか、そうだよね）

クビは免れたかもしれないが、この結果は別の意味で絶望的だ。子供の空想話を、部長のように立派な大人が真剣に考えてくれるわけではない。

（あうう……どちらにしろ、もうダメだ。部長の全裸は永遠に遠のいてしまった）

混み合うエレベーターの隅に乗り、降りると廊下をのろのろと移動する。オフィスに着いたのは始業時刻ぎりぎりだった。

落胆しながらもパソコンの電源を入れると、アポロン様の壁紙が現れた。半裸でベッドに横たわり、憐れみの目で萌花を見てきた……ような気がして、余計に落ちこむ。

（壁紙の設定を変えよう）

コトーの人気キャラクター、アニーのイラストを使うことにする。アニーは可愛くて元気で、ちょっとおしゃまなリスの女の子だ。制作部ではほとんどの社員が彼女を壁紙に設定している。萌花もそれに倣い、アポロン様はしばらく封印することにした。

「おはよう、美園ちゃん。金曜日はフォローありがとうね。助かったよー」

堀内が軽い調子で声をかけてきた。部長会議用の資料の件だ。

萌花は力なく振り向くと、「どういたしまして」と事務的に答える。金曜日のことは思い出したくない。いっそ、あの日をなかつたことにしてほしい。

「やっぱり美園ちゃんは役立つよね。蒲生さんじゃなくて、僕専用の補助係になつてくれない？」

「ヒツ」

反射的に顔をパソコンに戻す。冗談ではない。それでは、補助係ならぬ尻拭い係になつてしまう。

「馬鹿っ！ 何言ってるのよ」

「そうだぞ、堀内。美園さんをいいように使いすぎだ、お前は！」

いきなり堀内を怒鳴りつける声が出て、萌花はビクツとする。堀内の上役であるプランナーが二人、いつの間にか背後に立っていた。金曜日の夜、『堀内には、きつく言っておくからね』と萌花に詫びた先輩社員である。

「ええっ、なんですかいきなり。皆さんだつて美園ちゃんに雑用頼みまくってますよね？」

「いいから、自分のことは自分でやれ。ごめんね、美園さん。これから大変だけど頑張つてね」

「は、はあ」

堀内は二人に捕らえられ、ずるずると引きずられていった。

「ど、どうしたんだろ」

尋常ではない勢いに、萌花は動揺する。堀内が言っていたように、あの二人も萌花にあれこれと雑用を頼んできていたはず。一体、何があったのだろう。

「美園、おはよう」

蒲生が横に来て、萌花の肩を叩いた。

「あ、おはようございます」

「……」

蒲生はデスクの前に立ち、大きくため息をついた。そして、なぜかジッと見つめてくる。

「え？ な、なんですか？」

「あんたも大変ね」

「へ？」

萌花はあらためて蒲生を見返し、気がついた。彼女の眼差しには、アポロン様のそれと同じ憐れみあわれみがこもっている。

（どうして、なぜそんな目で私を？）

蒲生は鼻をすすった。しかも、うるうるると瞳を揺らめかせている。

（なっ、泣いてる？ 蒲生さんが、どど、どうして）

蒲生は萌花から視線を逸らすと、ハンカチでまた瞼を押さえた。涙ぐむ先輩を前にオロオロしていると、オフィスのドアが勢いよく開いた。

湖東部長の登場だ。

萌花はどきーんとして、気をつけの姿勢になる。

今日の部長はクールビズスタイルだ。梅雨晴れの陽射しが眩まぶしいオフィスを、堂々と進んでいく。部長がデスクの前まで辿り着きこちらを向くと、職場はピリツとしたムードになった。

「おはよう。今日もよろしく」

挨拶あいさつに続き、月曜の全体ミーティングに入る。

萌花は、隣で涙ぐんでいる蒲生を気にしながらも、部長の姿に注目する。彼を前に様々な感情が押し寄せてくるが、就業時間となれば脱・オタクである。仕事はきちんとしなければいけない。

「最後にひとつ知らせておくことがある。私の助手を一名、企画制作部の社員から選ばせてもらった」

オフィスにざわめきが起こった。

湖東部長の助手。それは、鬼のように仕事をこなす彼の雑務担当者である。

彼が企画制作部長に就任してこれまで、その役割は石橋課長が兼任していたが、とうとう耐えられなくなったのだろう。課長はもともと薄毛で悩んでいたが、この頃は抜け毛がさらに進行していた。制作部社員はみな、課長のつるりとした頭頂部に、助手役の激務を見ていた。

「制作部から一名？」

「誰を？ まさか俺じゃないよな」

不穏な空気が流れる中、萌花はハッと顔を上げる。

蒲生が、そしてプランナーの先輩二人が、同情と憐れみの目で萌花を見ている。

(ま、まさか)

湖東部長はオフィスをゆっくりと見回し、萌花の上でピタリと視線を止めた。萌花の心臓も止まりそうになる。

「美園萌花。本日付で企画制作部長助手の任を命ずる。役割の重要性を理解し、よりいっそう職務に励むよう。以上」

ミーティングが終わるや否や、部長席の隣に、助手用のデスクが設置された。萌花はそこへ移動するため、荷物を台車に載せている。

堀内の上役であるプランナー二人と蒲生には、前もって知らされていたらしい。今朝、

早く入社するようと呼び出され、『美園は俺が引き取ることにする』と、急な人事を告げられたそうだ。

原因は先週末の出来事。堀内の代わりに萌花が資料作りをした一件である。

三課の社員が、入社二年目の後輩に仕事を丸投げし、雑用係としてこきつかっている。その実態を目の当たりにした部長が怒ったのだ。

『自分の仕事は自分でやれ』

鶴の一声で決定となり、先輩三人はただ領いていたという。

幸運か不運か、希望か絶望か、混乱する萌花の頭では判断できない。

だけど、大変なことになったという現実には理解できる。

——これから大変だけど頑張っつてね。

——あんたも大変ね。

つまり、こういうことだったのだ。

「えっと……三課の皆さん、今までお世話になりました。それでは、私はこれで失礼いたします」

突然のことで、萌花はどう挨拶すればいいのかわからず、別れの言葉も単純なものになった。実際のところ、数メートル離れた場所に移るだけであるし、同じ部なのは変わらないので三課を出るといって実感が無い。

「ごめんな、美園ちゃん。こんなことになるなんて」

お気楽キャラの堀内までもが悲愴な顔でいる。蒲生や他の先輩社員達も沈痛な面持ちで、まるでお通夜のような雰囲気だ。

「さあさあ、早速移動しましょうかねえ、美園さん」

引継ぎのため萌花に付き添う石橋課長だけが、やたらと明るい。つるりとした頭頂部にライトが反射して、それも眩まぶしい。

（部長の助手って、どんだけ酷使されるの？）

恐怖に慄く萌花だが、会社が決めたことなら仕方ない。会社員としては辞令に従うほかない。いや、クビになるよりマシだ。そう思えばいいと自分に言い聞かせた。

「よし、来たな」

新しい席に台車を押していくと、湖東部長に待ちかねたというジェスチャーで迎えられた。窓からの光を背景に両腕を広げた姿は、アポロン様のように神々うつくしい。

しかし、今日ばかりは萌花のオタクモードも発動しない。仕事に対する不安が大きすぎて、萌える余裕がなかった。

デスクは三課で使っていた大きさの半分ほどしかなく、パソコンを設置するとほとんどのスペースが埋まってしまう。

ここで、どんな仕事をするというのだろう。

「では石橋課長。早速ですが美園への引継ぎをお願いします」

「承知いたしました。美園さんは働き者ですから、すぐ覚えてくれることでしょう」

部長と課長の会話に萌花は目を白黒させる。彼らは自分を即戦力として使う気らしい。

「あ、あのう、私は別に、それほど働き者というわけでは……」

「グダグダ言わない。ほら、仕事だ！」

部長に背中を押され、つんのめりそうになった。顔を上げれば、満面の笑みを浮かべる石橋課長。

「マニュアルなんてないからね。ひとつひとつ、しっかりと覚えてね」

「は、はい」

三課のスペースをちらりと見やれば、蒲生も先輩達も忙しそうに働いている。萌花は小さなデスクに目を戻し、自分の居場所はどこしかないのだと覚悟を決めた。

石橋課長の説明によると、湖東部長の助手というのは要するに、秘書的な役割りをこなすことだった。

スケジュール管理から書類の整理整頓、電話の取次ぎまで、とにかくやることが多いと言う。もちろん企画デザインにかかわる作業が主であり、彼の手足となって働くので休む間もないとのこと。

また、部長の指示で社内を飛び回ることも多く、自席に腰を落ち着けるのは、パソコン

ンを操作する間のみ。デスクが小さくても大丈夫なわけだと、萌花は納得した。
 「ひと通り引継ぎは済んだ？ よろしくな、美園」
 「はいっ、よろしくお願いします」

萌花は元気に挨拶しながら、ふと、あのことはどうなったのかと考える。全裸モデルの件は、部長の中でどう処理されたのか。忘れてしまったのか、気にも留めていないのか。「どうした？」

「えっ？ あ、いえいえ、別になんでもありません、ハイ」

「ふうん。それじゃ、始めるぞ」

そんなこんなで、肝心なことを切り出せないまま、助手としての日々がスタートした。

一週間、二週間と日々は過ぎていく。部長のハイペースについていくのは大変だが、萌花は必死で働いた。そして、この役割に自分の能力を最大限に生かすことを覚えていった。

「美園、製品番号No.3982とNo.3522の仕様書を開発部に返却してくれ。それから、糸田工業の本宮社長の来社が明後日に延びたと営業二課の沢口に伝えておくように。メールと口頭の両方で頼む。俺のスケジュールも調整しておいてくれ」

「はいっ」

「ほう、いい返事だな。空返事じゃないだろうな」

「いえ、きちんと記憶しました。ばっちりです」

萌花は記憶力が良く、固有名詞も数字も一度で覚えられる。多くの指示に対応できるのは、複数の仕事を同時にこなした雑用係の経験が生きているからだ。

また、デザインの種類と担当者の名前も直結するよう暗記していた。

「商品開発部から上がった海獣シリーズの新案だが、アイテムは五種類だったな？」
 部長の早口での確認に、萌花もぱっと答える。

「いえ、三種類です」

「担当は蒲生か」

「違います。西村さんです。今年度から彼がメインデザイナーになりました」

部長はニヤリとした。

「合格」

わざとミスを誘い、萌花を試すのだ。部長はたびたび、こういったテストをしてくる。しかし、どんなに試されても萌花は引つ掛からない。コトーに入社して一年、多くの先輩について仕事をしてきた萌花は、ベテラン社員でも勘違いやミスをするとは知っている。

また、自分の記憶や判断力は信じるに足るものだと何度も学習済みだ。相手が偉い立